右　鎮の名、今の甘肅地方是なり、哥舒翰之が節度使にして甘肅省西寧府に駐在す。【四】　高三十五書記　高適なり、適は已に翰が幕僚たり。【五】　哥舒　哥舒翰。【六】　入奏　京師(長安)に入り天子に軍務の事を上奏するなり、事は天寶十四載春にあり。【七】　勒强ひて命ずる。【八】　蔡子　希魯をいふ。【九】　先鋒　この時哥舒翰途中にて病を得しため京師に留まる、因つて希魯をして先づ隴右へかへらしめしなり。【一〇】　勇成歸　勇壯なことをするのが平生の習癖となつてゐる。【一一】　彎弓　弓をひく。【一二】　西射胡　胡はえびす、吐蕃をさす。【一三】　健兒　壯士のこと、軍人たるをいふ。【一四】　寧鬪死　いつそたたかうて死ぬのがましぢや。【一五】　壯士　上の健兒と同じ、軍人たるをいふ。【一六】　恥爲儒　儒者になるはにがとおもふ。【一七】　先鋒　官　都尉の官をさす。【一八】　先鋒得　戰場で先鋒をつとめたために得たのである。【一九】　才　或は材に作る、材器、伎倆をいふ。【二〇】　緣　よる。【二一】　挑戰　敵に對して戰を求むること、挑は「いどむ」。【二二】　須　「まつ」、そのいりようなるをいふ。【二三】　身輕　身體のはたらき輕捷なり。【二四】　一鳥過　一つの鳥が飛びすぎるやう。【二五】　槍急　槍を急につきだす。【二六】　萬人呼　多くの人がそのわざに驚きさけぶなり。【二七】　雲幕　この雲幕は雲の横はつてゐる幕といふことならん、幕府の幕をいふ、軍中にては幕を以て府となす。【二八】　隴府　隴府は開府儀同三司の位、哥舒翰をさす。【二九】　春城　春時の長安城。【三〇】　上都　長安をさす。【三一】　金匠匠　匠匠はぐるりと圍む貌なり、金とは黃金でかざりし絡頭(馬面をからめるつな)をいふ。【三二】　駝背　らくだのせなか。哥舒翰は朝廷へ使をだすときいつも白駱駝に乘りて一日に五百里を驅せしめしといふ。【三三】　錦模糊　模糊はおぼろなるさま、錦とは錦にてつくりし馬の旗かけをいふ。【三四】　咫尺　咫は八寸、尺は一尺、咫尺とはまぢかとみなすをいふ。【三五】　雪山　天山をいふ、此句蓋し班超傳贊の坦步葱雪、咫尺龍沙の句意を用ふ。隴右はそこと實は遠きも遠からずとかんがへてゐるといふなり、一說に雪山は武威の南にある山をいふと、其說によれば咫尺とは實際に近きことをいふなり。【三六】　歸飛　飛とはやくかへるをいふ。【三七】　青海隅　青海は隴右の近西にあり、隅はかたすみ。青を或は西に作る。【三八】　上公　公の上位なるもの、哥舒翰は開府の待遇をうくる故之を上公といへり。【三九】　紆寵錫　寵錫とは天子より恩寵を蒙りて物をたまはるをいふ、實は病のため辭退せるをかくて詐をかざりていへるなり。餘とはいまだにの意。【四〇】　突將　驍突を能くする將、蔡都尉をさす。【四一】　且　しばらく。【四二】　前驅　さきがけをする。【四三】　漢使　漢の蔡澤武帝のために西域に使せり、それらをおもひあはせてかくいふ、蔡が唐の天子の使となりてゆくをいふ。【四四】　黃河遠雁右は黃河の上流にあり。【四五】　涼州　甘肅省涼州府武威縣治、卽ち河西節度使の駐在所なり。【四六】　白蒿枯　白蒿は涼州地方の產物、用ひて酒か醸すといへり、枯とは成熟して釋(アラ)の枯死するをいふ、けだし夏となるをいふ。【四七】　君　蔡をさす。【四八】　情息　たより。【四九】　好在　お達者にてござるか。【五〇】　阮元瑜　魏の阮籍が父瑀、字は元瑜、詩徵の文章をよくす、作者つれに琉璃を以て高適にたとへてよべり、他詩にも多く例あり。

【題義】　隴右の節度使たる哥舒翰の部下なる都尉の官の蔡希魯が隴右へかへるのを送り、ついでに已に隴右に居る親友高適に寄する詩なり。製作時は天寶十四載春の作なるべし。

【詩意】　蔡希魯は平生勇壯なことをするのが習癖になつてゐて弓をひいて西の方胡のえびすを射る。彼は健兒であり壯士であつて、むしろたたかつて死ぬのをよしとするので儒者などになることを恥とかんがへてゐる。いま都尉の官であるがそれは戰陣で先鋒となつてはたらいたために得たものである。敵に對しては戰を挑むといふ大切なことがあるから彼の如き才能は大にいりようである。彼の身體の輕捷なことは一の鳥のすぐるが如くであり、彼が槍を急につきだす時には萬人が驚き呼ばはる。」彼は雲幕に於て哥舒開府に隨つてゐたが長安の春の城に赴くことになつた。そのときは馬頭には黃金の絡頭(おもがり)を匠匠とめぐらし、駱駝の背には錦の帕(はらかけ)を模糊とたれて來た。」　こんどはまた任地にかへることになつたのだが、彼の意氣では遠い雪山の路でも咫尺であるかのやうにかんがへて、青海のかたすみへとぶがごとく歸つてゆく。主人開府公はまだ天子の恩寵めでたくくださりも

のなどありておひきとめになつてをるので、馳突の將たる彼がとにかく前驅となつてひとあしさきにゆくのである。」漢の天子の使者ともいふべきおまへは遠く黄河の奥までゆくが、涼州のあたりはその頃は白麥が熟して夏になつてゐるのだらう。おまへがゆくついでに自分は友人の消息をたづねる、あの阮元瑜（高適）は達者でゐるのかどうか、と。

醉歌行〔原注〕別從姪勤落第歸。　醉歌行

陸機二十作文賦。
汝更少年能綴文。
總角草書又神速。
世上兒子徒紛紛。
驊騮作駒已汗血。
鷙鳥舉翮連青雲。
詞源倒流三峽水。
筆陣獨掃千人軍。

陸機二十にして文の賦を作る。
汝更に少年にして能く文を綴る。
總角にして草書又た神速。
世上の兒子徒に紛紛たり。
驊騮駒と作つて已に汗血なり。
鷙鳥翮を舉げて青雲に連る。
詞源倒に流す三峽の水。
筆陣獨り掃ふ千人の軍。

【字解】【一】醉歌行　醉ひての歌を詩に作る。【二】從姪　いとこの子をいふ。【三】勤　其の人の名なり、一に勤を勤に作る。【四】落第　科。西晉の太康・元康時代の文學者。【五】二十　二十歳。【六】文賦　文學を論じたる賦なり。【七】汝　勤をさす。【八】更少年　後に十六七とあれば、勤は機よりも年わかなり。【九】綴文　詩文をつづりつくる。【一〇】總角　つのがみ二つを一つにくくれるをいふ、少年のすがた。【一一】草書　書體の名、走りがき。【一二】神速　ふしぎに雖をはこぶことはやし。【一三】世上兒子　世間の少年。【一四】徒紛紛　いたづらに多し。【一五】驊騮　くり毛の馬、周の穆王の八匹の駿馬の一なり。【一六】作駒　わかごまであるときから。【一七】汗血　大宛國の天馬の如く血を汗にだす。【一八】鷙鳥　つよきとり。【一九】翮　たちばね。【二〇】連青雲　たかくとぶをいふ。【二一】詞源倒流　文章の力を江水を以てたとへたり、詞源は文章の湧きでる源をいふ、倒流とはさかさまにぶんながすこと、必しも逆流と解せざるなり。【二二】三峽水　三峽は江の上峽、明月峽、巫山峽、廣濟峽をいふと。【二三】筆陣　文學の世界を戰場を以てたとふ。【二四】獨掃　ひとりでなぎはらふ。【二五】千人軍　多くの軍勢

只今年纔十六七。
射策君門期第一。
舊穿楊葉眞自知。
暫蹶霜蹄未爲失。
偶然擺秀非難取。
會是排風有毛質。
汝身已見唾成珠。
汝伯何由髮如漆。
春光潭一作淡沱秦東亭。
渚蒲芽白水荇青。
風吹客衣日杲杲。
樹攪離思花冥冥。
酒盡沙頭雙玉瓶。

只今年纔に十六七。
射策君門に第一を期す。
舊楊葉を穿つは眞に自ら知る。
暫く霜蹄蹶く未だ失へりと爲さず。
偶然擺秀取り難きに非ず。
會ず是れ排風毛質有り。
汝が身已に見る唾珠を成すを。
汝が伯何に由てか髮漆の如くならむ。
春光潭沱たり秦の東亭。
渚蒲芽白くして水荇青し。
風は客衣を吹いて日杲杲たり。
樹は離思を攪して花冥冥たり。
酒は盡く沙頭の雙玉瓶。

衆賓皆醉我獨醒。
乃知貧賤別更苦。
吞聲躑躅涕淚零。』

衆賓皆醉ふも我獨り醒めたり。
乃ち知る貧賤の別るること更に苦しきを。
聲を呑んで躑躅涕淚零つ。

びきによりとりて答へしむ。【二八】君門　天子のごもん、朝廷をいふ。【二九】舊　在來、從來の義。【三〇】穿楊葉「戰國策」に見えたる楚の養由基が故事、養由基は柳葉を去ること百步にして之を射、百發百中なりしといはるる弓の名人なり、勳が文學に於けるゝ養由基の弓に於けるほどの技能ありといふなり、作者、柳を楊と改めて用ひたり。【三一】自知　自分自身が知つてゐる。【三二】暫駐霜蹄　これは人を馬を以てたとへいふ、上の「驊騮」の語を承く、勳が落第したるは馬の霜をふむひづめがちよつとつまづいた樣のものなり。【三三】失　過失、失策。【三四】擢秀　秀でたるを擢かるるなり、及第するをいふ。【三五】取　擢秀といふことを取り得るをいふ。【三六】會　俗語、「かならず」。【三七】排風　風をおしわけてとぶ、上の「鷲鳥」の語を承く。【三八】毛質　羽毛のつよき本質。【三九】汝身已見　已見汝身と同じ、見るとは作者が之を見るをいふ。【四〇】璀成珠　莊子に本く、つばを吐いてもそれがみな珠玉になる、片言たりとも美なるをいふ。【四一】汝伯　伯とは叔父伯父の伯なり、作者は勳が伯父の祿屬に居る人なり、故伯とは自己をさす。【四二】何由　いかにして。【四三】髮如漆　わかがへりて白髮がうるしのやうに黑くなる。【四四】潭沱「江賦」にみゆ、即ち淚落なり、また駘蕩なり、逐波動貌なりといへり。【四五】客衣　客とは勳をさす。【四六】東亭　城外の東亭。【四七】褚　蒲　なぎさに生えた蒲。【四八】水荇「アサザ」。【四九】客　客とは勳をさす。【五〇】杲杲　太陽の樹上にかがやくさま。【五一】攄　かきみだす。【五二】離思　わかれのこころ。【五三】花冥冥　冥冥とは咲きさかりておほひかぶさりくらきをいふ、花は即ち樹上の花。【五四】金　つく、なくなる。【五五】沙鳧　水邊の沙ほとりをいふ。【五六】雙玉瓶　一對の玉の酒瓶(さかがめ)。【五七】衆賓(一句)　屈原が「漁父辭」に衆人皆醉我獨醒、といへり、それを用ふ。彼は曾喰なり、これは實際別離の悲しまのため他人は醉へども自己は醉はぬをいふ。【五八】貧賤別　貧乏生活のなかのわかれ。【五九】吞聲　しのびになく。【六〇】躑躅　行不進貌なり。【六一】涕淚　はなみづ、なみだ。【六二】零　落つる。

【題義】 いとこの子杜勳が落第して故郷へ歸るを送り、別れの宴にて醉ひて作れるうたなり。製作時は天寶十四載の春、長安にての作なるべし。

【詩意】 晉の陸機は年二十にして文賦を作つたといふが、汝はそれよりも若くて能く詩文をつづる。またつのがみ時代から草書を不思議なほどすみやかにかき、世間の子供等は汝にくらぶれば徒らにごたごた存在するのみで價なきものだ。驊騮の駿馬はわか駒のときから已に血を汗にするだけの素質はあり、猛鳥は翮を擧ぐればただちに青雲につらなる。汝の文章の力は詞源滾滾としてあふれ、三峽の水を傾倒しておしながすが如く、筆陣にたてば一人を以て千人の軍を掃却することができる。』しかし今やつと十六七歳の少年で、朝廷に於て試驗問題にお答へして第一の成績を得やうとするのだ。ふだん柳葉を射て百發百中の技能あることは自分(勳)自身が知つてゐる。ちよつと霜蹄がつまづいた(落第した)ぐらゐでは過失とするにはあたらぬ。時機さへよければ、偶然羣衆から拔擢さるるの運命にありつけぬわけではなく、きつと汝は風を排して上るだけの猛鳥の本質はもつてをる。わしは汝が身は已に唾さへ珠を成すことを見とめてゐるが、わしはもはや年寄りになつた、どうしたらこの「を古」はふたたび髮が漆のやうに黑くなることができるだらうか。(それはできぬ)』　さて汝を見送らう

とすると、城東の亭では春の光りがゆたゆた動いて、なぎさの蒲の芽は白くめぐみ、あささの葉は青く水面にういてゐる。風はそよそよ汝の旅衣を吹き拂うて太陽はかがやいてゐる。樹上の花は暗くおほひ咲きて我がわかれの思ひをかきみだす。沙はらにころがつてゐる二つの玉の酒瓶には酒がなくなつてしまつた。他のお客たちはみな醉はれたがわしだけは醉ふことができぬ。ここに至つて貧乏生活のなかの別れが特別に苦しいものであることがはじめてよくわかつた。いまはなにも言へず、しのびぬにむせびないて足のあゆみもすすまず、ただなみだがおつるばかりである。

陪李金吾花下飲

李金吾に陪して、花下に飲む

勝地初相引。徐行得自娛。
見輕吹鳥毳。隨意數花鬚。
細草偏稱坐。香醪懶再沽。
醉歸應犯夜。
可怕執金吾。（執、諸本作李。）

勝地初は相引く、徐に行けば自娛するを得たり。
輕きを見て鳥毳を吹き、意に隨つて花鬚を數ふ。
細草偏に坐に稱ふ。香醪再び沽ふに懶し。
醉うて歸るは應に夜を犯すなるべし。
怕る可し執金吾。（或は李金吾）

【字解】【一】李金吾　李は姓、名は嗣業、金吾は左金吾大將軍なり、唐の制、左・右金吾衛ありて長官に大將軍各一人を置く、官中及び京城の警夜巡警の法を掌る。【二】勝地　景色のよき場所。【三】相引　李金吾にみちびかれてゆくをいふ。【四】徐行　しづかに、そろそろとあるく。【五】自娛　他人をまたず自分自身でたのしむ、次の二句が自娛の事實なり。【六】見輕　鳥毛のかるらかなるを認める、どこからともなく春風に吹かれてとびきたるものをさす。【七】吹　口にてふつとふいてみる。【八】鳥毳　鳥の腹に生えたにこやかな毛なり。【九】隨意　きままに。【一〇】花鬚　花房の中心にある雌蕊、雄蕊をいふ。【一一】細草　ほそきくさ。【一二】偏　ひとへに、もつぱら。【一三】稱坐　坐するにふさはし。【一四】香醪　かをりよきにごりさけ。【一五】懶再沽　さらに酒をかふのがおつくうである、これまでもはや十分飲みしゆゑこのうへかふのが心ずすまぬ。そのわけは裏に次の二句にのぶ。【一六】醉歸　ようて家へもどること。【一七】犯夜　規則にて定められたる夜間通行の制限をこゆるをいふ。【一八】可怕　おそろしい、これは戯を帶びていふなり。【一九】執金吾　漢の時、執金吾の官あり、唐の金吾の名はそれを採る、執金吾ならば官名にていふことになり、李金吾ならば直接にその人をさすことになる。金吾は鳥の名なりといふ、また或は執金吾の吾は鼯にて　執金吾の義なりともいふ、前說是ならん。

【題意】左金吾大將軍李嗣業に陪從して花さける樹の下で酒を飲みしことをのぶ。製作時は天寶十四載の春の作なるべし。

【詩意】このよい景色の場所へ初は人にみちびかれてきたが、そろそろとあるいてゐると他人をまたず自分みづからたのしむことができた。卽ち鳥のにこ毛が輕らかに飛ぶのをみつけてはそれを口で吹いてみたり、咲いてゐる花のなかの花蕊の幾本あるかをきままにかぞへたりしてみる。さてそこで坐を占め酒を飲んだが、細い草がすわるに最も適當なやうにはえてゐるし、酒は十分のんでこのうへ二度買ふのもじやまくさい感がする。もしそんなに飲んだら醉うてもどるのは夜行の刻限を犯すことに

なるだらう、こはいことこはいこと執金吾（或は李金吾）の君。

官定後戲贈（原注）時免河西尉爲右衛率府兵曹。　官定まりて後、戲に贈る

不作河西尉凄涼爲折腰。　河西の尉と作らざるは、凄涼腰を折るが爲めなり。
老夫恰趨走率府且逍遙。　老夫趨走を怕る、率府に且つ逍遙す。
耽酒須微祿狂歌託聖朝。　酒に耽るには微祿を須つ、狂歌して聖朝に託す。
故山歸興盡回首向風飈。　故山歸興盡く、首を回らして風飈に向ふ。

【字解】【一】官定　任官が一定せしこと、作者にとつてこれが最初の任官なり。【二】戲贈　贈とは自己に贈るなり。【三】免河西尉　免といへば已にその官になりて後に免ぜられし如し、其の名義ありて實務には就くに至らざりしものと見ゆ。河西尉は河西節度使の管下の尉官なり。【四】右衛率府兵曹　これは太子右衛率府兵曹參軍事の官をいふ、從八品下といふ卑き官なり、元稹の杜君墓係の右衛率府胄曹、「舊唐書」本傳の京兆府兵曹參軍、「新唐書」本傳の右衛率府胄曹參軍、とあるは皆作者のこの詩の自注により て訂正まるべきものなり。【五】凄涼　ものがなしき貌、二字折腰にかけてみる。【六】折腰　陶淵明が故事、淵明は五斗米のために腰を折りて長官につかふをいとひたり。【七】老夫　自らいふ。【八】怕趨走　趨走とは事務のためあちらこちらと奔走するをいふ、尉官となるときはかかる煩累あり、それをおそれる。【九】且　しばらく。【一〇】逍遙　ぶらぶらしてゐるさま。【一一】狂歌　他人からみれば氣ちがひじみたやうなうたをうたふ、きままの詩歌をつくりたり 祿　わづかな俸祿がいりようである。【一二】託聖朝　聖明の朝廷におのがからだを託す。【一三】故山　故郷の山。【一四】歸興盡　今まで故郷にかへりたいとかへりたいといふたが官が定まつてみるとかへりたいとの興もなくなつた、といふ。これは本心から官を惜ひて故郷を思ふはなくなつたには非ず、ちよつとそんな氣がすることをいふ。【一五】向風飈　飈とは下より吹きまくる暴風なり、必ずしも暴風をいふに非ず、風の義を取るなり。

【題義】河西尉たる空名の任官を免ぜられて太子右衛率府兵曹參軍事に任ぜられることにきまつたあとで戲に自分自身に贈つた詩である。製作時は天寶十四載。

【詩意】自分が河西尉にならないのは上官に腰を折るといふかなしさがあるためなのだ。このおやぢ（自分）は尉などになつてあちこち奔走することはおそれるのであるから、まあまあこの右衛率府に置いていただいてぶらりとしてゐやうといふのだ。酒にふけるにはちつとばかりの俸祿を頂戴する必要があるし、氣ちがひじみた歌をうたひながらありがたい朝廷にこの身をおあつらへしておくのだ。かうなると口ぐせにしてゐた故郷へかへりたいかへりたいも興がさめたやうでただ風にむかつて遠く故郷の方向をふりむいてみるぐらゐのことである。

去矣行　　去矣行

君不見鞲上鷹。　君見ずや鞲上の鷹、
一飽卽飛掣。　一たび飽けば卽ち飛掣するを。

【字解】【一】鞲　ゆがけ、臂にかぶせる革製の衣、鷹をするゐるに皮膚を損ぜざるやうにこれを用ふ。【二】鷹　タカ。【三】飛掣　掣は

焉能作堂上燕。
銜泥附炎熱。』
野人曠蕩無靦顏。
豈可久在王侯間。
未試囊中餐玉法。
明朝且入藍田山。』

焉ぞ能く堂上の燕と作つて、
泥を銜んで炎熱に附かむ。
野人曠蕩として靦顏無し、
豈に久しく王侯の間に在る可けむや。
未だ試みず嚢中の餐玉の法を、
明朝且つ入らむ藍田の山に。

【題義】作者右衛率府にありてそこより去らんと欲してこの歌を作る。去矣は「去らんかな」の意。製作時は天寶十四載。

【詩意】諸君見たまはざるや、彼の臂のゆがけにする忍られた鷹は一たび食にあけばすぐさま電光の如く飛び去ることを。（我も亦その鷹の如くなるべしとの意。）どうして座敷の梁に巣くふ燕となつて泥を口にくはへながら權勢といふ炎熱にくつついてゐることができやうか。』自分のやうな野人は胸中

「ひく」、ここは電の如く擊すの義にてすばやくとび去るをいふならん。【四】銜　ふくむ、口にてくはへること。【五】附炎熱　炎熱とは權勢の盛んなるをたとへていふ。【六】野人　田野の人、自己をさす。【七】曠蕩　胸中のひろきをいふ。【八】靦顏　靦はにようきりと面目をだしてゐる貌、靦顏は厚顏をいふ。【九】王侯間　貴族のあひだ。【一〇】餐玉法　玉をこなにしてたべる方法、「周禮」の玉府の條に王齊則共食玉、とみえ、古來玉を粉末にして食したりといへり。【一一】藍田山　長安の東南三十里に藍田縣あり、縣に覆車山あり、その山玉を產するにより亦た玉山の名あり。

とりとめなく大きくあつて鐵面皮のもちあはせが無い、どうしてながく王侯などいふ貴族の間に居られやうか。嚢中にたくはへてある玉をたべる法もまだ試みたこともないし、よい機會だから明朝にもなつたら、まあまあ藍田の山へでもはひりこんでみやう。

夜聽許十一誦詩愛而有作

夜許十一が詩を誦するを聽き、愛して作有り

許生五臺賓。業白出石壁。
余亦師粲可。身猶縛禪寂。
何階子方便。謬引爲匹敵。
雌索晚相逢。包蒙欣有擊。
誦詩渾遊衍。四座皆辟易。
應手看捶鉤。清心聽鳴鏑。
精微穿溟涬。飛動摧霹靂。
陶謝不枝梧。風騷共推激。
紫燕自超詣。翠駮誰剪剔。

許生は五臺の賓なり、業白くして石壁より出づ。
余も亦粲可を師とす、身猶禪寂に縛せらる。
何ぞ子が方便に階せらるるや、謬て引かれて匹敵と爲る。
雌索晚に相逢ふ、包蒙擊つ有るを欣ぶ。
詩を誦する渾て遊衍なり、四座皆辟易す。
手に應じて捶鉤を看、心を清くして鳴鏑を聽く。
精微溟涬を穿ち、飛動霹靂摧く。
陶謝枝梧せず、風騷共に推激す。
紫燕自ら超詣、翠駮誰か剪剔せむ。

君意人莫知。人間夜寥闃。

君が意人知る莫し、人間夜寥闃たり。

【字解】【一】五臺賓　五臺は山の名、山西省代州五臺縣の東北にあり、佛教の靈地とせらる、賓とは客分のこと、許生暫てここに寓して佛教を學びしをいふ。【二】槃白　佛經に純黑槃をなせば純黑報を得、純白槃をなせば純白報を得といふ、十使十惡は罪に屬して黑槃なり、五戒十善、四禪四定は善に屬して白槃なりといへり、槃白とはその槃が白卽ち善に屬するをいふ。【三】出石壁　山中の石壁の場所から俗世界へ出で來るをいふ、蓋し長安に來れるをいふ。【四】槃可　槃に禪の高僧、槃は卽ち瑛、可は慧可をいふ。達磨は慧可に傳へ、慧可は瑛に傳へ、瑛は道信に、道信は弘忍に傳へたりといふ。【五】綽禪寂　佛經に方便あれば慧併し、方便なければ慧縛、とあり、慧縛は智識がじやまになり、却つてそれにしばらるるをいふ、いま眞の禪の悟りを得ざるゆゑ禪寂に綽せらるるといふ。【六】何階　階はそれを階梯にするをいふ、何階は何由といふが如し。【七】子　許生をさす。【八】方便　權宜のてだて。【九】蹔引　蹔つてとは蹔遇の辭なり、引はひきよせらるること。【一〇】匹敵　あひて。【一一】離宗　離羣索居を略していふ、朋友と別れ散じてゐること。【一二】晚　晚年をいふ。【一三】包蒙、有擇　易蒙卦の九二に包蒙、上九に擊蒙の語あり、包蒙とは蒙昧なるものを包容するをいふ、擇家とは蒙昧なるものを擊ちて其の蒙を發くをいふ、此句は許生が自分(作者)の蒙を包容しまた啓蒙するをいふ。【一四】鄙詩　許生が自作の詩を朗吟すること。【一五】渾　すべて。【一六】遊衍　ゆつたりとくつろぐさま。【一七】四座　滿座の人人。【一八】鄙易　ひらきて所なかへる。【一九】鹿手　手をばたらかすにつれて、此二字は捶鉤へかかる。【二〇】捶鉤「莊子」知北遊に、大馬之捶鉤者、年八十矣、而不失豪芒とみゆ、大馬は大司馬、捶とはうつてきたへること、鉤は劍の種類にてかぎの如くまがれるものなり、この八十の老人が劍をうつに妙を得てうちたる鉤の輕重がどれもこれも同一なりといへるなり。この用法は看花捶鉤」とあれど看るばかりに非ず開くことならん、鉤をうつ音をきくに似たりといふなり。【二一】清心　上句の手は許生が手なるも此句の心は作者の心なり、清とは他の妄念なのぞくをいふ。【二二】鳴鏑　かぶら矢、これも上の捶鉤とひとしく詩の犀についていふ。【二三】精微　鄙詩の精密微妙。【二四】穿溟渤　溟渤は「莊子」には渤溟といへり、自然の氣をいふ、溟渤を穿つとは大自然の奥底まで貫通するをいふ。【二五】飛勤　犀の飛勤。【二六】摧飾當　いなづまのくだくるやう。【二七】陶謝　陶淵明、謝靈運、皆宋間の大詩人。【二八】枝梧　くひちがふ、不枝梧は詩題がそれと一致するをいふ。【二九】風騷　「詩經」の國風の詩騷や、屈原の作つた騷體の韻文。【三〇】共　許生の作が之と共にといふこと。【三一】推激　激字の用法少しく苦しめるかと考ふ、意は「激賞するに足る」といふことならん、「陶謝」二句は許生の詩の性質につきのべ。【三二】紫燕　漢の文帝の良馬九匹、其一を紫燕驄といふ、許生の詩能を比す。【三三】超詣　凡衆にこえる、超とは高くこゆること、詣とは遠くにまでいたること。【三四】翠駮　翠は馬については紫色をいふ、駮は色の不純なるをいふ、紫色にてぶちなるが翠駮なり、きやうなる馬をいふ。【三五】剪剔　剪はたてがみの毛をきること、剔は毛を刷くをいふ、剪剔とは毛なみをうるはしく整ふるをいふ。【三六】人　他の人。【三七】寥闃　閑はおとなきをいふ。

【題義】許十一が夜、その詩を朗吟したのをきいて、それをめでてこの詩を作つた。許十一を或は許十、或は許十損に作る。製作時は天寶十四載、長安にての作。

【詩意】許生は五臺山の賓客として佛教を學んだことがあつたが、その業は已に白く善なるものとなつて山中の石壁から俗界へ出かけて來た。自分も槃や可を師として禪の流れを汲んでみたが自分の修業は淺いもので身はなほ禪寂といふものに縛られてをる。それにどうしたおまへの方便によつたものであるかして、ふつつかものがまちがつておまへに引つぱられてそのあひてになつた。自分は親友と離れて心ぼそかつたのだが晚年ながらおまへと逢ふことができ、おまへからこの愚蒙を啓發されることをよろこぶのである。』　おまへが詩を誦するのをきくとすべてゆつたりとくつろいでをり、滿座のものみなあとしざりをする。さうしておまへの手のまにまに鉤を捶ち

きたへるのをみ、心をすましてかぶら矢のひびくやうな音をきく。おまへの誦聲の微妙な處は大自然の奥そこまでもつらぬくかとおもはれ、飛動するときはいなづまがくだけたかとおもはれる。おまへの詩の趣はむかしの陶淵明・謝靈運にも一致し、國風や離騷やと共に激賞するに足るものである。』紫燕の名馬はおのづから凡馬から超越してゐる。翠駮の馬の毛並みはいつたいだれがきつたり刷いたりしたのであるか。(人しれず苦心せる結果に成れるものならんとの意なるべし。)おまへの奥のこころは一般の他の人は知るものがない。(自分だけは知己のつもりだとの意ならん。)ただ夜がふけて人間界がひつそりしてゐるばかりだ。

戲簡鄭廣文虔兼呈蘇司業源明

戲れに鄭廣文に簡し、兼て蘇司業に呈す

廣文到官舍。繫馬堂階下。
廣文官舍に到る、馬を繫ぐ堂階の下。

醉則騎馬歸。頗遭官長罵。
醉へば則ち馬に騎りて歸る、頗る官長の罵るに遭ふ。

才名三十年。坐客寒無氈。
才名三十年、坐客寒くして氈無し。

賴有蘇司業。時時乞酒錢。
賴有蘇司業有るに賴りて、時時酒錢を乞ふ。

【平解】【一】簡。手がみをやる、この詩をやるなり。【二】鄭廣文。廣文館博士鄭虔。【三】蘇司業。國子司業蘇源明、鄭虔の二人餘に作者の親友なり。【四】廣文。廣文館博士鄭虔其人をいふ、前に見ゆ。【五】騎馬歸。馬に乘つて私宅へもどる。【六】官長。長官をいふ。【七】才名。才ありとの評判。【八】坐客。虔を訪問する客で坐するもの。【九】寒無氈。氈は「まうせん」、「まうせん」がないから坐客はさむい。【一〇】賴。よる、おかげでといふこと。「さいはひに」と副詞のやうにみるも可なり。【一一】乞。これは音氣、與ふることなり。

【題意】戲れに鄭虔がもとに手がみにかへてつかはし、かねて蘇源明に呈したる詩なり。製作時は天寶十四載、安祿山の亂起らざりし以前。

【詩意】鄭虔が廣文館の官舍へくると馬をざしきのきざはしのあたりでつないでおく。それから酒を飲んで醉ふとまた馬にのつてかへつてしまふ、だからずゐぶん長官からののしられる。』虔が人才だといふ名聲は三十年もひびいてゐるが、宅へ訪問するお客は坐するに「まうせん」さへないから寒がつてゐるほどである。ただ司業蘇源明があるおかげで時時は虔に酒を買ふ錢をあたへてくれる。

夏日李公見訪

夏日、李公に訪はる

遠林暑氣薄。公子過我遊。
遠林暑氣薄し、公子我に過りて遊ぶ。

貧居類村塢。僻近城南樓。
貧居村塢に類す、僻にして城の南樓に近し。

傍舍頗淳樸。所須亦易求。
傍舍頗る淳樸、須つ所も亦た求め易し。

隔屋喚酒家。借問有酒不。
墻頭過濁醪。展席俯長流。
清風左右至。客意已驚秋。
巢多衆鳥鬬。葉密鳴蟬稠。
苦遭此物聒。孰謂吾廬幽。
水花晚色靜。鹿足充淹留。
預恐樽中盡。更起爲君謀。

【字解】【一】夏日　何年の夏の日なるや詳ならざれども亂亂の事も見えざれば天寶末年安祿山の反せざる以前なるべし。【二】李公　一本に「李家令」とありといふ、李家令は太子家令李炎ならんといふ。【三】過我　過は過訪をいふ。【四】貧居　自宅をいふ。【五】遠林　城中から遠くはなれた林。【六】城南樓　長安城の南の樓、少陵は韋曲杜曲などに近き地ゆゑかくいふ。【七】村塢　塢は小さき障壁をいふ。【八】餘　かたよる。【九】なく、かざりけなし。【一〇】傍舍　あたりの人家。【一一】淳樸　人心がまじりけ間　試みにとふ。【一二】隔屋　となりをいふ。【一三】酒家　酒をうる家。【一四】借　長　のべしく。【一五】不　いなや。【一六】墻頭　土塀のうへ。【一七】過　塀をこさせること。【一八】濁醪　にごりさけ。【一九】ないふ。【二〇】展　むしろ。【二一】長流　これは漢川の流れをいふならん。【二二】驚秋　すゞしきれがはくは。【二三】此物　鳥と蟬。【二四】聒　かまびすし、やかまし。【二五】淹留　淹留はひさしく滯留すること。【二六】水花　ほすのはな。【二七】鹿　こひ充とはそれだけのねうちに充當するをいふ。【二八】預　豫の借字。

【題義】夏の日、李公に訪はれたので作つた詩である。天寶末年長安にての作。

【詩意】城外遠くの森林では暑氣も薄いので李公子は我が宅へ遊びに訪問された。我が貧乏すまひはまるで片田舎のをかの樣なところで、かたよつてゐて長安の南の城樓と遠くない。近傍の人家の人情は淳樸で我がいりようなもの（酒をさす）もたやすく手にはひる。すなはち一軒越しに酒家をよんで「どうだ、酒があるかないか」とたづねる。すると酒家は土塀ごしににごり酒をこちらへよこしてくれる。それを飲むため席をのべしいて長い川の流れを俯してみる。」清らかな風は左右から吹いてくる、お客のこころではすゞしいのではや秋がきたのかと驚き怪む。樹木に鳥の巢がおほくてさまざまの鳥がたたかふし、木の葉が密にしげつてゐるから鳴く蟬もたくさんゐる、自分はこの樣のものやかましいのにこまつてゐる。わしのいほりが幽靜だなどとはだれがいふのか。ただ蓮の花はゆふがたしづかにたつてゐる、このながめは我がこの處に逗留するだけのねうちを十分もつてゐる。ゆつくりこの景色をめづべきである。それにしても樽のなかの酒がなくなりはせぬかと氣づかはれるので、席から起ちあがつてあなたのために工夫をめぐらすのである。

309
65

終